平成19 年度国際インターンシップ体験記
東北大学大学院 環境科学研究科 木村研究室 ラメザーニ マスーメ
指導教官: 木村 喜博 教授
研究課題: 人間の安全保障 巨大地震からの復興計画
派遣期間: 2007/04/09 – 2007/06/30
派遣機関: Tehran University faculty of law and political science
受入教官: Professor Ms.Nasrin Mosaffa

2007 年の4月からおよそ 3 ヶ月間、イラン共和国南部に位置するケルマーン州バムに滞在した。アルゲ･バム (ارگ بم, Arge-bam) は要塞都市の遺跡である。サーサーン朝ペルシア期に最初の都市が建設される。サファビー朝期に城壁が完成したが、1722年以降放棄され、廃墟になった。2003年12月26日の地震で大損害を受ける。 アルゲバムは2004年にユネスコ世界遺産に登録された。

夏季のバムは日中40度を超える暑さである、非常に乾燥しているので、外出時は水分の補給が欠かせない。また、砂漠からの砂嵐もあるので帽子とサングラスも必需品である。夜間は蚊を媒介した風土病にも十分な注意が必要である。東国境沿いは治安も悪化している。

震災後、家を失った人達は行政サイドから指定されたキャンプ地に、鉄製のコンテナを改造し、住宅としている。空調はあるもののやはり電気の供給がストップするとすべてが燃えるように熱くなるのである。その上水の供給も時折ストップする。

震災復興の建設需要からイラン全土より労働者がバムに流入してくる。また、テヘランなど他都市の富裕層は震災後の土地需要からくる地価高騰をみこして住宅地等の急造および投機的土地売買に奔走している。そのため2次的な損害として、土地に自生し、バムの特産物であるなつめを生産するなつめやしの木が無計画に伐採されている。

震災前はバムに居住しているのはバム人だけだったが、このような多種多様な目的を持った人が流入したため混乱の様相を呈している。すなわち、従来バム人は血縁を主体として生活空間を構築していた、たとえば、近所は親戚で固めているので誰がどこに住んでいるのか、子供でも熟知しているというのが一般的状況であった。

そのため、たとえば、「渡辺家」の血縁者で構成されている土地に血縁以外の者がその間に土地を得るというのは難しい状況であった。ところが震災後、前述したように他の土地から人々が流入したためこの生活空間が崩壊している。地縁に根ざした信頼関係が失われたため、お互いの存在を警戒するようになり、従来のような居心地の良さが失われセキュリティが低下している。

私の研究の主目的は震災前の社会状況を十分に考慮して震災後の復興計画を立案すること、および、被災した人々をエンパワーメントして、計画立案主体へのアプローチを容易にすることである。

現在この作業が困難なのはハード面の建設計画または実行する政府や支援外国政府が十分に「ローカルナレッジ」を考慮しないためである。計画立案、実行には予算がともなうのでどうしても数値化計量化して効果を計る作業がかかせない。これらはいわば「科学的根拠」にもとずく「パワーナレッジ」である。

他方、私が重要と考える「ローカルナレッジ」は数値化計量化するという作業に、現時点では、なじまないため、どうしても計画者および計画実行者のマインドから省かれる傾向にある。これは、被災した人々にとって著しい不利益を生む場合がある。そのため、国家の安全保障から人間の安全保障へ計画立案者の意識、計画の主目的をシフトさせる必要がある。また、震災後の人々のニーズを集約し、これらの復興計画に反映させるシステムを構築しなければならない。

今回、この現地調査によって、私が考えている研究の方向や視点が非常に有用であり、今後必要になってくることが実感でき、さらなる研究に向けた意欲がかきたてられた。また、自分の目でみて、自分の頭で考えるという学問的基本姿勢の重要性を改めて痛感した。本プログラム、関係者一同に深く感謝申し上げる次第である。

ありがとう　ございました

A container house in camp side in Bam

The other picture of camp

Dried date tree by owner of land